

## 小学校 音楽科 部会

部会長名 上野小学校 校長 渡邊 伴子

実践者名 採銅所小学校 教諭 帆足 梓

### 1 研究主題

児童が楽しみながら日本の音階を使った音楽づくりに取り組む学習指導  
～活動に応じた言語活動の設定と教具の工夫を通して～

### 2 主題設定の理由

#### (1)我が国の音楽について

小学校の音楽にとりいれられている我が国の音楽は、わらべうたや民謡、祭りの音楽、和太鼓や箏などの和楽器がある。また、和楽器奏者の活躍により、テレビや商業施設など学校外でも聞く機会は増えた。さらに、半数以上の児童が地元の祭りで鉦をたたいた経験があり、児童が我が国の音楽を日常的に耳にする機会は増えていると考えられる。

ところが児童にこれまで学習した日本の音楽について問うと、「祭りの音楽」や「わらべうた」などの既習曲は一つも出ず、共通教材の曲やポピュラー音楽、日本人作曲家・作詞家による歌唱教材を回答した。さらに、「静かにねむれ」「山のポルカ」といった外国の旋律に日本語の歌詞がついた楽曲などの回答もあった。アンケート後に、既習の我が国の音楽のことを伝えると、児童たちは思い出したような反応や「祭りの音楽も日本の音楽か」と初めて知ったような様子が見られた。

これらのことから、子どもたちは生活の中で我が国の音楽を BGM として耳にする機会は増えているが、伝統音楽としての意識がなく、遠い存在であることがわかる。

また、国立政策研究所の調査では、世界各国の音楽の中から我が国の音楽を聴き分けることについては、相当数の児童ができているが、我が国の音楽の様々な特徴をとらえて聴くことには課題があると報告されている。さらに教師への調査で、日本のうた(唱歌やわらべうた、民謡など)の指導について、興味・関心のもちやすさ、身に付けやすさのいずれにおいても、学年が上がるにつれて低下すると感じていることが明らかになった。

国際化の進んでいる現在、外国人と関わる機会が格段に増えてきている。そのため、自国の文化について誇りをもつためにも、我が国の音楽文化について学校で学ぶことは意義深い。また、日本の音階の特徴や和楽器の特徴を知ること、街中で氾濫している音楽の中から我が国の音楽を聞き分けたり、良さを感じたりすることができると考えられる。

#### (2)音楽づくりについて

音楽づくりの活動は、歌唱や器楽、鑑賞の教材よりも実施率が低い。福岡市教育センター『平成26年度研究紀要の音楽科調査』では「ねらいに沿った音楽づくりの授業が実施できているか」の設問で、「実施した」43%、「実施していない」57%と明らかに低い。教員の苦手意識や、どう指導してよいか分からないといった指導方法の問題や、楽器がそろっていないといった環境面の問題が考えられる。

本学級の児童もこれまでの学年で音楽づくりをする機会が少なく、音楽づくりの活動

を歌唱や器楽よりも遠い存在として感じていたようである。

### 3 主題の意味

#### (1) 「児童が楽しみながら」とは

音楽は楽しくできることが大切である。本学級の児童にとってはどこか遠い存在である「音楽づくり」の活動に「楽しさ」を味わわせることが、より近い存在に「音楽づくり」が変わることへの近道と考える。しかし、音楽づくりの活動において、設定した課題で音楽をつくりあげることができずに活動を終わってしまうと、消化不良のまままで不満が残り、楽しむことはできない。音楽づくりに対する意欲や技能を育てるためにも、この題材においては旋律をつくりあげ、自分で演奏することが要となる。「楽しみながら」最後まで旋律をつくりあげることがことで、児童が「次も音楽づくりをしたい」「もっと音楽づくりをしたい」と思えるようになると考える。

#### (2) 「日本の音階を使った音楽づくり」とは

この題材では、5音で構成された日本の音階である都節音階を用いて音楽づくりを行う。音楽づくりの活動は1年生から積み上げて学習できるように内容が構成されている。

① 音遊び（1年、2年） ② リズム創作など（2年～6年）

③ 旋律創作（2年～6年） ④ イメージによる音楽づくりなど（1、3、4、6年）  
旋律創作では、2年生の旋律の一部の音を変更する旋律遊びからスタートし、中学の決まったリズムに3音、5音など音を限定した旋律づくりから、高学年の音楽のしくみを生かした旋律づくりへと発展している。

#### (3) 「活動に応じた言語活動の設定」とは

本題材は「春の海」の鑑賞の活動から始まり、箏による「さくら さくら」の演奏による器楽の活動、「子もり歌」による歌唱の活動、日本の音階で旋律をつくる音楽づくりの活動で構成されている。

鑑賞の活動においては、音楽が表す情景を「言葉」や「記号や線」で表し、感じたことを他者に伝えるため、また次時の箏での演奏への意欲を振り返りの場面で書かせ、自分の思いを言葉で書いて表現するための言語活動とした。

器楽の活動では、箏を演奏してみた感想を言葉に表すことで、演奏前に感じていたことと、演奏後に感じたことを比較して児童にとらえさせることができる。

歌唱の活動では、聴いて感じ取ったことを言語化することで、歌の表現の方法についてじっくり考えることができる。

音楽づくりの活動では、児童が作った旋律に対する思いや意図をワークシートに記入することで、児童の思考の内容を他の友だちに伝えたり、自分自身の思考を振り返ったりすることにつながる。

これらのことから、それぞれの教材に応じた言語活動を仕組むことで、より我が国の音楽への理解が深まり、音楽づくりの意欲が高められると考えられる。

#### (4) 「教具の工夫」とは

本題材は鑑賞・器楽・歌唱・音楽づくりのすべての活動において、箏を用いて取り組むこととした。旋律づくりを鍵盤楽器で行う方が簡易であるが、日本の伝統的な楽

器に対する興味・関心を高めることと、箏では5音で構成された必要な音のみが使われていることから、題材をつらぬいて箏を使うこととした。そこで、箏を用いることで児童の負担にならないよう、どのような教材や教具が効果的か考えて教具の工夫を行った。

#### 4 研究の目標

児童が楽しんで日本の音階を使った音楽づくりができるようにするために、題材の各活動に応じた言語活動の設定と教具の工夫を通して音楽科学習指導の在り方を明らかにする。

#### 5 研究仮説

日本の音階を使った音楽づくりをするために、下記のような活動に対する言語活動の設定と教具の工夫を行えば、2小節の旋律をつくることができるであろう。

- ・題材導入の鑑賞の活動で、我が国の音楽に対する関心と箏の演奏への意欲を高めるために、実際に楽器に触れて音をださせ、箏と尺八の表現する情景を言葉や図で表せるようにする。
- ・箏で既習曲「さくら さくら」を箏の絃名を漢字で表した楽譜（以下絃名譜）を見ながら演奏する活動と演奏後の感想を記録させることで、箏の演奏に対する抵抗感をやわらげ、箏での旋律の演奏の楽しさを体感できるようにする。
- ・歌唱の活動「子もり歌」を通して、日本の音階が5つの音で構成されていること、明るい感じの音階と物悲しい感じの音階が2つの音が異なるだけであることを知り、日本の音階の特徴を理解できるようにする。
- ・題材後半で、箏を使って音楽づくりをする活動と旋律を作る際に工夫した点を言葉で表現する活動を通して、音楽づくりの楽しさを感じとることができるようにする。
- ・題材の終末で、一人ひとりが作った旋律を2人組・3人組でつなげて演奏したり聴きあったりする活動と互いの演奏を聴き、感想を書いたり伝えたりする活動を通して、友だちと協力して音楽をつくりだす喜びを味わわせるようにする。

#### 6 研究の計画

##### (1) 題材名「日本の音楽を楽しもう」

教材名「春の海」宮城道雄作曲「ことに親しまう」「子もり歌」「せんりつづくり」

共通事項 音色、リズム、旋律、音階、反復、問いと答え、変化

##### (2) 題材の指導計画

配	学習目標	学習活動	指導上の留意点・【評価規準】(評価方法)
1	和楽器のひびきと旋律の美しさを味わいながらききましよう。「春の海」〈鑑賞〉	○箏と尺八の音色に親しみ、全体の構成をつかんで聴く。 ○箏と尺八の音色や旋律のかかわり合いに気を付けて聴く。	実物の楽器や映像資料を活用して、情景などを想像して聴きながら、楽曲への関心を高めるようにする。 【関①】(演奏・行動観察) A・B・A'の構成とそれぞれの部分の特徴を感じ取れるようにする。

			【鑑①】（行動観察、ワークシートの記述）
2	ことに親しみ、「さくらさくら」を演奏してみましよう。	○箏のしくみと音の出し方を知り、五音で音階が構成されていることをたしかめる。 ○「さくらさくら」を絃名で書かれた楽譜（絃名譜）を見ながら演奏する。	楽器の扱い方や演奏の仕方について音を出せるようにする。 絃名が分かるようにシールをつけ、楽譜の漢数字を見れば、演奏ができることに気づくようにする。 【関②】（演奏・行動観察、ワークシートの記述）
1	日本の旋律の美しさを味わいながら歌いましょう。 「子もり歌」〈歌唱〉	○曲想を感じ取って歌う。 ○二つの旋律を、それぞれの感じの違いを味わって歌う。 ○箏で演奏し、明るい感じの音階と物悲しい感じの音階の2種類の日本の音階が使われていることをたしかめる。	教科書の楽譜や挿絵を参考にしながら、子供をあやしたりねかしつけたりする時の様子を想像するようにする。 二つの旋律の感じ（明るくのどかな感じ・物悲しい感じ）や楽譜の違いにも気付くようにする。 【関③】（演奏・行動観察） 【技①】（演奏聴取）
3	日本の音階を使って旋律をつくりましよう。 「せんりつづくり」〈音楽づくり〉	○日本の音階の音を使って2小節の旋律をつくる。 【本時】  ○前時に作った旋律と、ペアの友達の旋律を組み合わせ、4小節の旋律に仕上げ、発表する。	4分の4拍子で2小節の旋律を作り、その際リズムの例、または自分で考えたリズムに音を当てはめて作るようにする。 どのようにまとまりある旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。 【関④】（演奏・行動観察）  作った旋律を友達の旋律と組み合わせる時に、最後の音を自然に聞こえるように変更することができるようにする。 【創①】（演奏聴取・ワークシート） 【技②】（演奏聴取・ワークシート）

## 7 指導の実際

### (1)主眼

箏を使って、旋律の音の上がり下がりやリズム、終わりの音を工夫して、2小節の旋律をつくることができる。

## (2)授業仮説

日本の音階で旋律をつくる活動において、以下のことを行えば、音の上がり下がりやリズム、終わりの音を工夫して、2小節の旋律をつくることができるであろう。

- ①「さくら さくら」で演奏した楽譜（絃名譜）と律音階の五線譜を提示しておく。
- ②リズムが思い浮かばない児童のため、リズムの例を掲示しておく。
- ③児童用のワークシートは、絃名譜で記譜できるようにし、例示したリズムを用いる児童のために、該当するリズムの枠に網掛けをしておく。

## (3)展開（4／5）

	学習活動・内容	教師の支援と指導上の留意点◆評価の観点
導 入	1 「さくら さくら」を箏で演奏し、日本の音楽で使われている音を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「さくら さくら」の演奏の出だしをそろえるために、合図の声をかける。</li> <li>○ 前時の「子もり歌」で2種類の音階が使われていたことを振り返り、「さくらさくら」の音階で使われている音をたしかめるため、都節音階を表記した五線譜を提示する。</li> </ul>
	2 本時のめあてをつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">めあて 日本の音階を使って、2小節分のせんりつをつくろう。</div>	
展 開	<p>3 旋律の音の上がり下がりやリズム、終わりの音を工夫して、4分の4拍子で2小節の旋律をつくることを確認する。</p> <p>(1) 箏で音を確認しながら、旋律をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リズムを決めて、旋律を考える。</li> <li>・最後の音が終わる感じ、続く感じにするために五・八・十（ミ・シ・ミ）の音で終わる</li> </ul> <p>(2) 出来た旋律をワークシートに記録する。</p> <p>4 つくった旋律を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ スムーズに旋律づくりの活動に入れるようにするために、例示したリズムに音をあてて旋律をつくるか、自分でリズムも考えて作るかを選ばせる。</li> <li>○ ワークシートに旋律を消し書きするために、クリアファイルに絃名譜を入れてバインダーではさみ、ホワイトボードマーカーで絃名を記入させる。</li> <li>○ はやくできた児童には複数つくるよう助言する。さらに多くできた児童には、おかわりシートに書かせる。</li> <li>◆ 日本の音階に興味・関心をもち、その音を使って旋律をつくったり組み合わせたりする学習に主体的に取り組もうとしている。【音楽への関心・意欲・態度】</li> <li>○ できた旋律を発表するために、一人ずつ箏を演奏させる。</li> </ul>

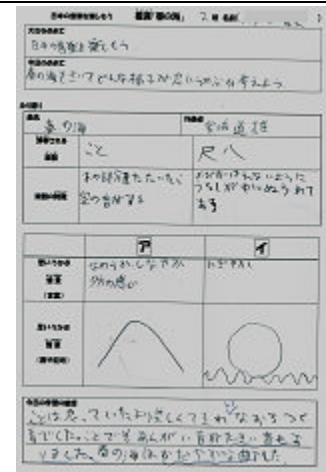
終末	5 本時のふり返しをし、次時の確認をする。	○ 学習を振り返るためにワークシートに感想を書かせる。
	(1) 本時の感想を書いて振り返りを行い、次時への見通しをもつ。	○ 次時は、つくった旋律を友だちの旋律と組み合わせる4小節の旋律をつくることを伝える。

### 8 研究のまとめ

本題材において児童が楽しく音楽づくりに取り組むために、次のような言語活動の設定と教具の工夫を行った。

#### (1) 鑑賞の活動における言語活動の設定

本単元の導入として、題材を通した大きなめあてを確認したあと「春の海」を鑑賞した。普段の生活の中で日本の音楽を意識して耳にする機会が少ない児童に、和楽器の音に触れさせて音の特徴を意識できるようにした。ここで設定した言語活動は音楽から思い浮かぶ情景を言葉や図で表現し(図1)、友だちと交流させた。その際、表現する言葉のヒントとなるように、2学期から音楽の教科書に貼って使わせている「曲想を表す言葉」(図2)の一覧を参考にさせた。



【図1 ワークシート】

次に箏と尺八の楽器の特徴などを教科書で確かめた。その後、本物の箏と尺八(竹笛)を実際に演奏してみせ、生の音色を聞かせた。どちらの楽器も実際に見るのが初めての児童ばかりで授業の最後に、箏の絃をさわって音を出す体験をさせた。演奏してみたいという意欲をもたせることができた。

元	おちついた	その他
元気な	しずかな	あたたかい
あかるい	ねむくなるような	つめたい
多くうな	気持ちよい	かたい
力がわいてくる	いやされるような	やわらかい
ゆきが出る	おだやかな	まるい
力強い	おちやかな	とがった
かばつな	おちつくような	ひびきのある
はく力がある	リラックスできる	かん高い
スケールが大きい	心がなごむような	ふしぎな
インパクトがある	やすらぐような	行進曲風
かっこいい	ゆったりとした	パレード風
堂々とした	どっしりとした	サンバ風
生き生きとした	重々しい	南風風
ゆうやかな	おごそかな	日本風
勇ましい	ずしんとくる	朝の感じ
はげしい	しっとりとした	昼の感じ
たくましい		夕方の感じ

【図2 曲想を表す言葉(抜粋)】

#### (2) 器楽の活動における教具の工夫

はじめに、親指につける爪の大きさを合わせ、絃のはじき方と左手の置き方を指導した。続いて箏の持ち方と移動の仕方、置き方を指導し、一人1台ずつ準備した。また、教科書で座り方、左手の置き方、絃をはじく場所の確認をした。あらかじめ箏の龍角に絃名を書いたシールを張り(写真1)、絃名譜で演奏ができるようにした。シールは中心である七の絃のシールを赤に、絃名譜の3行目のはじめで音がとぶ五の絃のシールを黄にし、演奏時に迷わないようにした。



【写真1 絃番号の貼付】

また、教科書の「さくら さくら」の楽譜には、歌詞の下端に絃名が記してあるが、それとは別に箏の練習用絃名譜を

児童用に編集し、配布した。(図3)「さくら さくら」を絃名で歌い、旋律を番号にのせて少し歌える状態にしてから演奏させた。番号に対応した絃を親指で弾くだけなので、児童らは簡単に感じたようだった。番号を歌

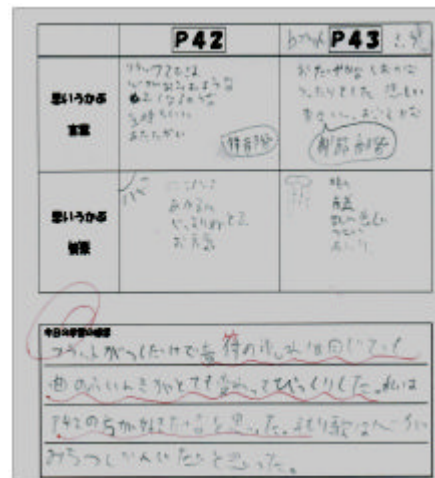
十	七	五	七	七	1	さくら
十	七	五	七	七	2	
十	七	五	七	七	3	
十	七	五	七	七	4	
十	七	五	七	七	1	半調子
十	七	五	七	七	2	
十	七	五	七	七	3	
十	七	五	七	七	4	

いながら指を動かして練習する様子が見られた。歌詞の「はなざかり」にあたる絃名譜の最後の行は絃の番号が「斗・為・巾」と音が一オクターブ高くなっている。

教科書では原曲通り書かれているが、慣れない読みと  
 【図3 絃名譜】  
 順番が児童らには難しく感じられたようで、混乱していた。最後は教科書の通り演奏してよいと伝え、絃名譜と教科書の楽譜のどちらも見ながら演奏する様子が見られた。時間の最後に演奏の感想を一人ずつのべさせた。だれもが、思っていたよりも簡単に音が出たこと、曲が演奏できたことを感想で述べていた。たった1時間の授業であったが、最後の行の斗・為・巾の絃が使われている「はなざかり」の旋律以外は全員が演奏できた。また、2人の児童は絃名譜通りに演奏ができていた。授業後や翌日の休み時間に「七、七、八～」と楽しげに友だちと歌いあう児童の姿が見られた。

### (3) 歌唱の活動における言語活動の設定

「子もり歌」では明るい感じの律音階と物悲しい感じの都節音階の2種類の子もり歌を聴き、曲想の違いを感じ取った。ワークシートに、曲を聞いて思い浮かぶ言葉や情景を書かせる言語活動を設定した。その際、赤ちゃんをおんぶして子守をしている様子やおもちゃを使って赤ちゃんをあやす様子などを動作化し、思い浮かぶ情景を具体的に想像し、言語化できるようにした。(図4)



【図4 「子もり歌」のワークシート】

次に律音階の五線譜の旋律を階名で読み、日本の音階で5つの音が使われていることをたしかめた。日本の伝統的な音楽は5つの音を使った音階であることを伝えた。また、教科書 P42 と P43 の楽譜を見比べて P43 の楽譜にはフラットがついている音があり、音階の中で2つの音が半音下がっていることを確かめた。明るい感じがする律音階の音2つの音が半音下がることで、雰囲気が一転し物悲しい感じがすることに、素直に驚いている児童が多かった。最後に絃名譜を見ながら都節音階の子もり歌を演奏した。絃名譜を見ながらの演奏であったが、すぐに演奏できた。

### (4) 音楽づくりの活動における教具の工夫

これまで音楽づくりの経験が少ないため、音を音楽に構成する際、音符を楽譜に記入するのは難しい。また、旋律づくりの試行錯誤の段階では、音符を書いたり消したりするのが煩わしく感じられる。そこで鉛筆よりも簡単に書いたり消したりできるクリーナー付のホワイトボードマーカーを使用した。さらに無色透明のクリアファイルに「せんりつを考えるシート」(写真2)をはさみ込み、バインダーで止めた。前時のうちに、旋律を記入するワークシートは五線譜か絃名譜のしやすい方を選ばせたところ、全員が絃名譜を選



【写真2 旋律を考えるシート】

扱した。児童らは「さくら さくら」の絃名譜に慣れてきたからだと考える。縦書きの枠に、指定したリズムで書けるように書き込む枠には色をつけ、その部分に音を入れていくようにした。また、終わる感じ、続く感じにするために、最後の音は「五・八・十」いずれかの音（階名ミ・シ・ミ）を選ぶよう吹き出しで示した。絃の番号と階名が対応しやすいようにそれぞれワークシートに配置した。

音楽づくりの時間では、児童は音を出しては書き、変更してはシートを書き直していたが、選択した筆記具でスムーズに消し書きができるため、どんどん書き込んでいた。

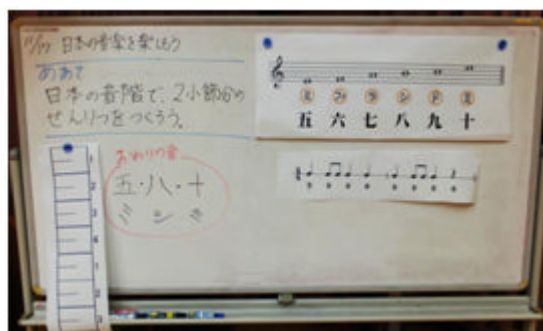


写真3 本時の板書

旋律が完成したら別のワークシートに書き写し、

他の旋律を作らせた。たくさんつくった児童は4つの旋律を作ることができた。

完成した旋律の発表では、全員が旋律を披露することができた。しかし提示したリズムで正確に演奏できなかった児童がいた。全体的には、2小節の旋律を全員が作り上げることができ、本時の目標はおおむね達成することができた。

## 9 成果と今後の課題

教材に応じた言語活動の設定と教具の工夫により、全員が2小節の旋律を作り上げ、題材の最後に友だちと旋律をつなげて演奏することができた。

(1)鑑賞の活動における言語活動の設定では、箏や尺八などの日本の音楽に対する興味関心をもたせ、曲から感じたことを「曲想を表す言葉」からあてはまるものを見つけたり、友だちと感じたものを交流することで、言葉と音楽のそれぞれ表すものについて表現する言葉を以前よりも増やすことができた。また次時の器楽の活動に向かう気持ちを書き表すことができた。

(2)器楽の活動における教具の工夫では、鍵盤楽器やリコーダーといった西洋の楽器とは異なる日本の伝統音楽で演奏されてきた箏で、旋律を演奏することで、我が国の音楽への興味関心を大いに高めることができた。児童への事後アンケートでは、「ことをひくのが楽しかった」「さくらさくらをことでひけておもしろかった」など、肯定的な反応を得ることができた。

(3)歌唱の活動における言語活動の設定では、律音階と都節音階の感じのちがいについて、全員が言葉で表現することができていた。日本の音階の特徴についても正しく理解し、5つの音のうち、2音が異なるだけで、今日の雰囲気が大きく異なることもつかむことができていた。

(4)音楽づくりの活動における教材の工夫では、日本の音階をつかった旋律づくりのために、5音の音階で音が構成されている箏を用いたことで、必要な音のみを選ぶことができたので、迷うことがなかった。また、旋律の試行錯誤をする際に、児童が漢数字で旋律を書けたことと、筆記具の工夫をしたことで、音符に煩わされることなく旋律づくりに没頭することができたと考えられる。



課題としては、音楽づくりの活動で旋律の発表をした際に、リズムが正確に演奏できずにいた児童が何人かいた。音楽の要素をリズムや音の上がり下がりなどいくつか取り上げて指導したが、リズムに絞って、児童にリズムをたくさん叩かせ、リズムをしっかりつかんだ上で旋律づくりに入る必要がある。また、歌唱の活動での子もり歌は、曲の感じを表すために曲想を表す言葉の一覧から言葉を選ぶことはできていたが、音の様子と選んだ言葉にズレがある児童がいた。「子もり歌」の様子を表す言葉に「力強い感じ」と書いていた。実際に言葉の表す力強い歌声で子もり歌を歌って見せることで、そのズレに気づかせることができた。しかし、言葉の表現するものと音が表現するものを、日々の授業の中で擦り合わせていく必要がある。

◎参考文献および資料

- 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 文部科学省 2008年  
『小学生の音楽 5 指導書研究編』 教育芸術社 2015年  
『小学生の音楽 5 指導書実践編』 教育芸術社 2015年  
『小学校音楽科 新学習指導要領ガイドブック ポイントと事例』 小原光一編著 2008年  
『日本音楽との出会い 日本音楽の歴史と理論』 月溪恒子 2010年  
「小学校学習指導要領実施状況調査」 国立政策研究所 2012年  
「思いや意図をもって表現する児童を育てる音楽づくりの学習指導」 福岡市教育センター  
2014年